

御茶の水書房

2020. 8

## 『樺太における日ソ戦争の終結～知取協定』

ニコライ・ヴィシネフスキー(著)、小山内道子(訳)、白木沢旭児(解説)

「知取協定」とは、1945年8月22日、樺太東海岸の知取町(現マカローフ市)でソ連軍と日本軍司令部代表により南サハリン(樺太)の戦闘停止に関して締結された協定で、本書の原題となっている。

### 戦後移住してきたサハリン州住民向けの概説書

著者ヴィシネフスキー氏は2008年ユジノサハリンスクで行われた日ロ合同シンポジウムでの北大・白木沢旭児教授の報告「樺太における終戦」によって初めてこの協定の存在を知ったという。

ソ連軍のサハリン侵攻作戦の目的は対独戦の戦勝国として、日本軍国主義の壊滅と、樺太・千島の占領達成だったから、日ソ戦争に関するソ連の出版物ではサハリン島における戦闘の完了は、ソ連軍の樺太南部への英雄的な攻撃作戦の成功による日本軍壊滅の結果とされた。既に満洲においてヴァシレフスキー・秦会談による日本軍の無条件降伏の合意があり、日本軍の無条件降伏は当然のことで、知取協定は公文書としては保存されなかったのだろう。

しかし、著者はこの停戦協定があったからこそソ連軍の南サハリン侵攻作戦が完了し、何百という犠牲者を未然に防ぐことができたと高く評価する。

そしてこの協定と「知取町」を記念しアピールするべく本書を執筆したのである。そのため日本側の多様な資料を入手し、ロシア人翻訳家の援助を得て読み込み、数年かけて4章から成る本書を完成させた。膨大な数の注がついているが、理論的な学術書ではなく、戦後大陸から移住してきたサハリン州住民のために、「知取協定」を含め意外に知られていない日ソ戦争の経緯を、写真を多用してルポルタージュ風の概説書として執筆したのである。

### 翻訳者・紹介者としての関心と夢

2017年北大で、著者は「サハリン・樺太史研究会」の招聘による「“知取協定”と樺太における戦争の終結」という報告を行い、「知取協定」締結をめぐる状況と協定内容を紹介した。

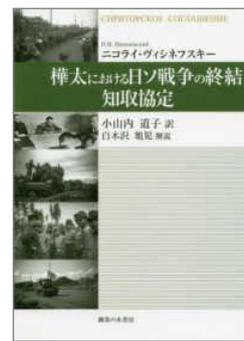
訳者はこのとき通訳を務め、その後、既に出版されていた本書を通読した。最も興味を惹かれたのは、第1章「南サハリンをめぐる避けがたい戦闘」だった。ここには日露戦争の結果失った南サハリン(樺太)を取り戻すことを目指すソ連側、スターリンの野望が具体的に述べられている。本書を翻訳・紹介したいと考えるきっかけとなった、樺太侵攻に関

するソ連の基本的スタンスである。

スターリンは1920~30年代のソ連極東における軍事的建造物すべてを日本との戦争準備に向けて築造した。それは1939年のノモンハン事件(ハルハ河戦争)の関東軍の大敗に反映された。

ただし、この事件後の世界史の流れは、極東を逸れた予想外の激流となる。同年8月に独ソ不可侵条約が締結された直後、ドイツはポーランドへ侵攻、これに抗した英仏の対独宣戦布告により第二次世界大戦が開始された。その直後に日独伊は三国同盟を締結、さらに1941年4月の日ソ中立条約締結へと続く。ところがドイツは同年6月、独ソ不可侵条約を破ってソ連侵攻を開始する。全く晴天の霹靂、無防備なソ連は以後約4年にわたり国家存亡をかけ、死力を尽くした総力戦を強いられる。

この間日本は同年12月、真珠湾攻撃により対米戦争の泥沼へ踏み出す。日独伊との戦争を共



に戦う英仏中米とソ連は、今や連合国として連携を深めていく。アメリカは1941年から「レンド・リース法」他によりソ連を含む連合国に武器、食料、衣類など膨大な物資の援助を行い、1945年2月「ヤルタ会談」でF・ルーズベルトはソ連に対日参戦を強く

要請する。満洲には100万の関東軍が残っており、米軍が沖縄、日本本土への上陸作戦を行うには、数十万米兵の犠牲が予想されたからである。

秘密協定では、ソ連はドイツ降伏後3か月以内に参戦し南サハリン、千島列島を占領、領有することとされた。この密約はスターリンにとって独ソ戦の試練を乗り越えた後の千載一遇のチャンスだっただろう。2か月後ソ連は日本に日ソ中立条約の不延長を通告、対独戦に余力が出た分、日ソ戦の具体的準備を加速させる。日ソ中立条約破棄は既に予定されていたはずである。ソ連の満洲、樺太侵攻は独ソ戦の壊滅的消耗により疲弊したソ連単独では不可能で、連合国の要請・連携とレンド・リース法の援助があって初めて遂行できたのである。

日本がドイツ降伏後1、2か月以内に降伏していたら、原爆投下もなく、樺太、千島も日本領のまま残っていたはずだという夢は楽しい。

(小山内 道子、翻訳家、サハリン・樺太史研究会会員)